

2008. 10. 1
月刊通信
はなしがい

第267号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円 (1年1,500円千共)

同じことなんだよね。」

また、「朗読のアナ」についての指摘は、一般的な朗読への鋭い批評となります。

「それが、いわゆる、朗読ってことをやるときの一番大きなアナの一つだね。自分の方で感情なり意味なりを確立しといて、それを声に出せば、何か成り立っているというふうな感じになる。まだそれこそ混沌とした中からへことばが生まれてくる、その過程こそ大切なのに。」

わたしはインターネットでさまざまな朗読を聴いています。お芝居でもするように読む人や、心と声とがまるで分離したような人は大ぜいいます。

●朗読教育の目的

では、竹内さんは朗読を通じてどのような教育を目指しているのでしょうか。こう言います。

「朗読そのものがうまくなるってことを、私なんかの場合には、あまりもくろんではいない。どういうことかというところ、子どもが全身で生き生きとして、声も出るし、思考も想像力も活発に働き、とにかく

今、一瞬のゆるみもなく表現が動き出している、今も充実して生きているということがそこで成り立ってばいい。そういうことの一つの側面、あるいは、そういうものを持ちきたすためのきっかけとして、朗読というものが考えられるべきではないかと考えているのです。」

「朗読という行為は、そういうからだ全体の表現行為の一部にすぎない。ですから、朗読とはどういうものかというふうには、一つのジャンルとして位置づけ、その中に閉じ込めて技術的なことを考えるよりは、そういう動き全体の中の一部として常に開かれたものとして考える方がいいと考えるのです。」

近ごろ、教育において、「ことばの力」が重視されています。日常のコミュニケーションでの話し・聞き能力の低さが問題になっているからです。わたしはさらに、読み・書きの能力と結びつける必要性を感じています。日常を越えて、視野を広めて、目に見えない世界をとらえる能力を育てるものです。人間のコトバの力は、声のことばと文字のことばとの相互協力によって成り立っているのです。

竹内敏晴さんは『ことばが劈かれるとき』という本で有名です。1995年10月号「はなしがい通信」二号」で取りあげました。竹内さんは子どものころ難聴で、十七歳ごろまでことばが使えませんでした。のちに演出家として名をなすようになり、ことばの専門家としてたくさんの本を出しています。

その後、竹内さんの本は何冊も読んでいますが、つい最近、朗読の根本を解き明かしたすばらしい本を発見しました。『話すということ(ドラマ)——朗読源論への試み』(1981国土社)です。「朗読源論」ということばにひかれて図書館で借りたのですが、朗読にかぎらず、ことばのからだとことばとの関係——人間の教育全般について書かれた名著です。

最初の十数ページを読んで、「これはすばらしい」と思って、夢中でメモを取りながら読みました。ところが、図書館の本は背中からパリンと割れてしまいました。バラバラにならないようにそうっと読んでいた内に、手元に一冊欲しくなりました。

インターネットの書店で調べたら新版がありました。十三年後の1994年に国土社の「現代教育一〇一

選」の一冊として刊行されていたのです。ハードカバーの装丁です。これから大切に読み返します。

●教育の基礎

タイトルにカッコ書きされた「ドラマ」を生かすとタイトルは「話すというドラマ」になります。内容は朗読ばかりではありません。ことばの教育全般にふれています。文章論もあります。声でよむとイメージのわきやすい文章とそうでないものがわかります。教科書の文章をていねいに読みながら分析しています。こうしたらいい文章になるという具体的な指摘もあります。しかし、竹内さんの本領は、からだと声とのかかわりを根本から述べた点です。

まず「朗読」について次のように言います。

「朗読という名称はいつごろ生まれ、いつごろ教育用語として定着したのかまだ知りませんが、私は好きではありません。しかしほかにまだ呼び名が見つからないので止むをえず用います。」

「表現よみでない読みはあるのだろうか」とも言います。わたしは我が意を得たりという思いです。本

来の朗読とは、文章の字づらをよみ手がただ単に読み上げるものではありません。竹内さんの考える朗読とは次のようなものです。

「文章に書かれていることばは、その心の動き、あるいはイメージを、さぐるための手がかり、であるにすぎない。」「だから「私」は、他人の文章に触れて、それに触発されたことを、ある場合には、それについて、語る——これが朗読と言われる作業ということになります。」「話す、ということは、時間の流れに生きていることです。一刻一刻に過ぎてゆく時間の中で、ことばが生まれ、次々発展し、消えてゆく。そこには現在しかない。」

表現というと、一般にはまったく自分の内部から生み出されものと思われています。わたしは画家の中川一政を思い出します。晩年には毎日のように「駒ヶ岳」に通って、山と向き合って絵を描きました。ただ山の姿を写していたわけではありません。山から受けた印象や感動を表現していたのです。

竹内さんが朗読で問題にするのは文章との関わりです。ここから声による文章批評が生まれます。

「朗読というのは、ことばに一言一言ふれるにつれて、そのイメージがちゃんと自分の中に浮かんできて、その世界の中で生きるといふ作業でしょう。ところがこの文章、さっき聞いただけでいねいに読んでるわけじゃないけれど、どうも雑だなあ。絵が書いてあったら、ことばによって生まれてくるイメージをつなげて発展させていく作業が絵によってごまかされるので。ごまかされるってことが分からないからさ、その絵を見て、こういうもんだなあと思いついて読んでしまう。そう大ざっぱに読んでしまったらさ、一つ一つのことばは全然生きてこないからね。」

ただ単に声に出して読めば文章の理解が深まるわけではありません。

「自分の中に動いてくるイメージをことばで書いたとき、そのことばで自分の中のイメージが読む人の中に成り立つか立たないかってことを感じとる能力ってのが、たとえば文章に対する芸術的感受力というようなもので、詩人とか小説家とかは、その能力が明確でなきゃダメなわけでしょう。読みとる方でも